

正会員
 京都大学大学院工学研究科
 都市社会学専攻 助教授
木村 亮
 KIMURA Makoto



秘密のテクニック教えます！

アフリカに限らず定価の付いていない物を買う場合、気をつけなければならないことがある。「状況がいまひとつわからない場合、いくらで買うと最初に言ってはいけない」ということである。

お土産を前にして、よくこんな会話が聞えてくる。「これいくら」、「いくらなら買う」、「〇△なら買うよ」、「それは無茶だ、〇×でないとだめだ」…。この3番目の会話のように、客が曖昧な気分で値段を言うと、その値段より絶対下がらない。逆にとんでもなく相手に有利な値段を言ってしまうと、いらな思ってもその値段で買わされる。新聞紙に包まれ、かばんに押し込まれる。「値段は有って無いようなもので、売り手の言い値の20%から始めてみては…」と物の本には書いてあるが、売値がわからないのである。客の動作や顔色を見ながら品定めをして、売り手は脳みそフル回転で客に迫ってくるのである。

私の若いときの買い方は、必ず先方に値段を言わせていた。ただしこの方法、かなり時間



店で戯れて売り物に座り休憩

間に余裕のある『やから』でないと使えない。「値段言わないと買わないよ」とそっぽを向いて立ち去ろうとすると、店の親父が服をつかんで引っ張っている。まあまあということになり、肩など組み



はにかみながらの笑顔

ながら交渉再開。傍から見てみると漫才のような状態を何度も繰り返す。絶対こちらから値段を言わず、すきあらば安物の時計などちらつかせて『物々交換』状態に持ち込む。『話し疲れたから、お茶でも飲むか』状態にし、最終的には土産物屋を喫茶店にすることができれば、上級者である。

今は遊びながら物を買う時間的余裕がないので、これで買うぞという値段を威勢よく言う。どうせ値切っても最終的には『外国人料金でしか買えない仕組み』になっている。相手のほうが一枚も二枚も上手である。今は税金と思って、少し高めに買いつつ、だまされたふりをして、売主が喜ぶ姿を垣間見ている。

おまけとして、『お腹を壊さず、バイキングを楽しむ方法』をお教えしよう。アフリカの優良ホテルやロッジでは、朝・昼・晩と結構バイキング料理が続く。結論は「マヨネーズで和えたものを皿の上に載せない。つまり取らない」という至極簡単なことである。なぜだめか。新鮮でなくなったものを、マヨネー



教え子とピラミッドの前で

ズの力を借りて食べさせるからである。逆に、椰子の木陰など普通は暑いので、マヨネーズが

絡むと新鮮なものであっても腐りやすいし、腐っていてもよくわからない。白状すると、アフリカで一度だけ我慢できない腹痛を起こした原因がこのケースだったからである。ただし、アフリカの庶民的レストランでは、マヨネーズなどないので心配御無用である。

『ねこ車』の使い方

最後に 100 年前のナイロビでの話。

開墾地では現地の人たちが、土や木を頭に載せて運んでいる。イギリスの入植者が見て、あまりにかわいそうだと思い、一輪車を輸入し買い与えた。土木の現場で使う『ねこ車』である。その後数日して、再び開墾地に行ってみると、『土の入った一輪車を頭に載せて運んでいた!?!』。うそのような本当の話。実際私が直接見たわけではないが。

「あの親父、頭に載せにくい物をくれたものだ。せっかくくれたから使わないと怒られる。厄介な器だな」との会話が聞こえてきそ



サハラ砂漠での一番好きな写真



最近の一番のお気に入り写真

うだ。驚くことに『車輪の文化』がなかったのだ！ 転がして運ぶと運びやすいということから、車輪を使うことを思いついていなかったのだ！ 日本なら奈良時代には牛車や馬車を使っていたであろう。電気や機械や土木といった工学系の勉強を教えるのは、なんらかの工夫がいたると思った。3次元的な図を描くセンスに欠ける技術者が驚くほど多い。

これからもアフリカ通い

自転車でのサハラ砂漠縦断や東アフリカでの技術協力が、『アフリカ奥深し』の中心的话题であった。南アフリカやエジプトを散歩したこと、モロッコの屋台で羊の脳みそに醤油をかけ食べたこと、スペイン領ではあるが大西洋に浮かぶカナリア諸島で現場見学したことなど、少し変わった面白い話題、実はまだ隠し持っている。「カナリア諸島」の名前は、スーパーの『ゆで蛸』のパッケージに発見できる。アフリカ奥深し。

6回にわたり、私のホラのような本当の話？に付き合ってください、ありがとうございます。これからもアフリカを奥深く探求します。